

大腸菌08群の関与が疑われる黒毛和種放牧牛の 血色素尿症

丹後家畜保健衛生所

○ 田 中 究 田 中 義 信 極 山 太

【はじめに】黒毛和種繁殖農家の同一放牧場において、2008年と2011年に放牧牛が1頭ずつ血色素尿を呈した。両事例とも尿から大腸菌08群（以下、08群）が分離され、関連があるものと推察し、調査を行った。【発生概要】①1例目は2008年8月に血色素尿を呈して2日後に死亡し、腎臓、尿から08群が分離された。②2例目は2011年8月に発熱、重度の貧血（Ht11%）、血色素尿を呈し、尿から大腸菌（ 10^7 CFU/ml）が分離され、08群が確認された。ピロプラズマ原虫は確認されず、尿中レプトスピラ抗原も陰性であった。抗生物質による治療に反応し、血色素尿と尿中08群は消失したが、糞便から08群が分離され、保菌している可能性が示唆された。第20、39病日の尿から大腸菌が分離されたが、08群は分離されず、Ht値は29%まで回復した。③両事例の08群ともベロ毒素産生能は確認されず、生化学的性状と薬剤感受性は近似していた。【疫学調査】本症の原因として08群が関与し、同一放牧場における野生鳥獣を介した感染を疑い、放牧同居牛と水系環境の大腸菌を調査した。放牧同居牛（尿、便）、放牧場及び牛舎の飲水から08群は分離されなかったが、いずれの飲水中も大腸菌群数は 10^2 CFU/ml以上であった。【対策】発症牛の隔離、牛舎消毒、牛舎飲水の塩素消毒と放牧場の飲水場整備の指導を継続中で続発は見られていない。